

【発表論文】

近代中国女性のモビリティー経験と女性 「解放」に関する再考

秦 方

(原文は中国語 翻訳：解 放)

本稿では 20 世紀初頭の中国人女性のモビリティー（移動）経験に焦点をあて、女性の「解放」思想を分析しようとする。所謂モビリティーとは、士紳階級出身の女性が、女学校や慈善と政治運動などに参加することによって、その身体、イメージ、言説などが公的空間において流動することを指す。こうしたモビリティー経験は、物質的には 19 世紀後半から隆盛した新しい交通手段と現在の大衆メディアによって生まれ、また言説が「幽閉」から「解放」へと変化したことを反映している。当時の人々は、女性のモビリティー経験に対してある種の楽観的・美的イメージを抱いており、モビリティーそのものは、女性の解放の象徴となった。しかし、歴史や歴史記述の視点から見れば、モビリティーに対するこのような推奨は、当時の一般人や知識人が、近代性が持つ進歩性と解放性を受容していることを反映していると言える。女性の「解放」は決して自明な概念ではない。植民主義と言論覇権の歴史的フレームが内在している。したがって、私たちはモビリティーに関連する女性の「解放」思想に対して十分に警戒しなければならない。

1905 年、秋瑾（1875-1907）は、若い女性の日本留学を励ますために、次のような浪漫に溢れたことを語っている。「我が国の女性は経済的に困窮していたため、許された期間があまりにも短く、志を持っていても実現できなかった。その後、動きやすく簡素な服装で、閉ざされた部屋から出て、楽しい気持ちで船に乗り、自由の空気を吸いながら、東にわたり、学業に励む準備をした。」¹ 実際、20 世紀初頭、秋瑾のように家の外の世界を楽観的に思い、胸を躍らせた女性は少なくない。数多くの士紳階級の女性は、学校教育のために、あるいは国や民族の政治に参加するために、頻繁に家を離れ、都市、省や国境を越え、公的にも私的にもモビリティーする集団となったのである。例えば、当時の公的空間において最も活躍している女性教員と女子生徒は、それまではずっと家の中に閉じこもっていたが、女学校の出現によって、教授や学習のために家を出るようになった。距離が近い場合、彼女たちは毎日家から学校まで歩き、時には人力車に乗って学校から他の公的空間に移動して活動した。距離が遠い場合、蒸気船や汽車のような近代的な交通手段を利用して、新しい学校や都市、そして国家に移動して、教師や学生となった。

このようなモビリティーは、身体の移動のみではなく、女性の言説、文字、更にイメージなどが社会において伝播され流通されることを含む。今まで比較的に研究されてこなかった清王朝末期の女学

¹ 秋瑾『実践女学校付属清国女子師範工芸速成科略章』、『秋瑾全集箋注』（郭長海編集、吉林出版社、2003 年、p368）

生の写真に注目すればわかるように、19 世紀末から 20 世紀初頭、都会における撮影技術の流行にと
もない、数多くの女性教員と女子生徒は写真を撮り、互いに送り合い、もしくは出版していた。写真
の撮影と流通は、身体の移動ほど頻繁ではなかったが、その流通の範囲と影響は身体の移動と同じ程
度であった。写真は、文字ほどの解釈のシステムを持たないが、写真を撮られる側の社会的身分と地
位を明確に示すことができる。被撮影者の姿勢や服装、装飾、背景などが被撮影者の身分を提示して
いるだけでなく、その写真の流通方法そのものも、自己の説明の有効な手段となっている。従って、
身体の移動やイメージの伝播は共に「重要な能動性の場」²を形成している。その中で、女性は自らの
身体や行為、イメージ、社会関係に対して検討、把握、コントロールするようになり、最終的に、新
しいジェンダーの規範とモラルの境界を形成した。

もっと広い視点から見ると、モビリティの重要性は、単に清末の女性が家の外での経験を増やし
たところにあるのではなく、「幽閉」から「釈放」へと言説の時代的転換が見られるところにある。
中国の伝統社会、とりわけ、宋の時代以降では、儒教思想の世俗化によって、女性は意識的に「幽
（奥ゆかしさ）」「嫺」（上品さ）、「貞」（貞淑）、「静」（静粛）を自らのモラルの規範として
きた。もちろん、家の内と外を区分するということで、女性が事実上全く家を出なかったというわけ
ではない。明清歴史の専門家によれば、少なくとも、明清の時期には、多くの士紳階級の女性は、親
戚を訪れたり、郊外で散歩したり、寺院を参拝したり、時には他の家で居候しながら家庭教師をし
たり、もしくは家族と長旅に出たり、家事を手伝ったりしていた³。しかし、当時の女性は外出する際、
外の世界と接触を慎みながら行動することで、個人のモラルと社会的地位を表そうとした。こうした
行為の規範と公的空間への警戒は近代まで続いてきた。例えば、曾国藩の娘である曾紀芬（1852-
1942）は、その自筆年譜の中で、「私は幼年にも関わらず、姉たちに従って一步も外に出ることがな
かった。」⁴と回想している。注目すべきことは、この記述は単に曾氏が青年期に「内外有別」規範を
実践したことではなく、彼女が 80 歳の高齢にも関わらず、依然として当時の規律を忠実に守ったこ
とを意識的に強調している点である。

しかし、こうした「幽」に傾倒する言説と実践は、19 世紀後半から批判や否定されるようになった。
西洋から中国にきた人たち（主に宣教師）と中国のエリートたちは、自分たちこそが女性の解放者で
あると主張し、家に閉じ込められて慰み物化しているという中国人女性のイメージを作り出し、女性
が家に閉じ込められることによって得られる奥ゆかしい上品さを批判している。かつて女性たちが能
動的に美德として認識して選択した「幽」という徳目は、「困」（閉じ込められる）という受動的か
つ無力感に溢れる俗悪と変容してしまった。林樂知の「幽閉」論は典型的な言説である。林樂知によ
れば、中国人女性を抑圧する三つの習俗のうち、二番目に「幽閉」を挙げている。「中国で高い身分
の女性は、外の俗悪に染まることを恐れ、一生家を出ることがない。女性を釈放させないことは、教
化が良いものではないということを示し、女性を永遠に幽閉していることは、教化が進んでいないこ
とを意味する。」⁵ これに対して、林樂知は「釈放」という単語を提示し、「幽閉」を打破する良

² Judith Butler, *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of "Sex"*, New York & London: Routledge, 1993, px.

³ Timothy Brook, *The Confusions of Pleasure: Commerce and Culture in Ming China*, Berkeley: University of California Press, 1998, pp. 182-185; Dorothy Ko, *Teachers of the Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth-Century China*, Stanford: Stanford University Press, 1994, pp115-142, 219-224;

⁴ 『崇徳老人自訂年譜』、李又寧編集『近代中国婦人自叙文選』第一号、聯経事業出版社、1980 年、p15

⁵ 林樂知編集、任保羅口述『論中国変法之本務』、『万国公報』、1903 年第 167 号、pp7-8

薬であるとしている。「女性を釈放するとは如何なることなのか？世界の人々を釈放することは、最も重要なことであり、女性を釈放することは、東の諸国を救う良い方法であろう。中でも中国は最も深刻であり、その病症への処方薬として、これを除いて効くものはないであろう。」⁶ 宣教師と中国の士紳階級の解釈と宣伝によって、中国人女性が本来の推奨されてきた「家の中で生活する」ライフスタイルと、そこから生まれるモラルは、この時期に徹底的に変容し、女性の原罪となり、改革しなければ存在できないものとなった。

こうした受動的、無力的に部屋に閉じ込められた女性のイメージと、顕著に比較されているのは、同時代に賛美されていた、逆境を乗り越え、明るい人柄を持ち、活気に生きる新女性像である。中国人女性、広く東洋の女性は、「網から逃れ、塀を越え、雷や波のごとく、束縛から抜け出すその進歩の速さは、驚くほどであった。」⁷とあるように、旧秩序を打破する行動の主体として期待された。立ち足かかる壁を打ち壊してこそ、女性は自由な新世界に入ることが可能となる。このような女性の気質に関する言説の変化は、清末の女性の身体、言語、イメージ、そして観点が事実と想像の空間におけるモビリティに対して合理性と合法性を提供した。

しかし、注目すべきことは、清末におけるモビリティの言説の背後に、当時の人間が現代的進歩、開放、文明の特質に対する楽観的な想像と過剰な美化が見られるが、その具体化と実現には相当に苦労したという点である。女性たちが、国家のため、女学校のため、独立のために、都市空間とメディア空間の間を移動する時、モビリティが、彼女たちの活動範囲を拡大し、アイデンティティを変容させたのも事実であるが、同時に、内外の区別と、優雅と低俗の区別を曖昧化させてしまったため、かえって女性の文明的イメージを損なう結果となった。その結果、本来モビリティを推し進めてきた社会の雰囲気は、女性に対する伝統的性別の規範を守護し強化させ、最終的に、ある種の「自由であるが道徳範囲内」という混同された女性の気質を形成させた。⁸

先述したように、秋瑾は女性たちが楽しんで船に乗り日本へ行くことを勧めていたが、自分が日本刀を持参して旅したことについては隠していた。秋瑾の親友である呉芝瑛の回想によれば、「彼女は日本からの帰りに上海を渡った時、自分の大変だった留學生活について語りながら、新しく入手した日本刀を見せ、『弱い女性として、万里の道を三等の船倉でクーリーと一緒に数回往復した。暑い気温の中で、病気で倒れることも何度かあった。自己防衛として頼りになるのはこの刀だけだったので、身から離すことはなかった。』と語った。」⁹

また、遊女と新女性は写真を撮ることがよくあったが、前者はファッションの流行を導く存在ともなった。従って、優雅と低俗の区別を強調するために、新女性は写真を撮る際、姿勢、服装、背景などの細部を利用して、自らの文明性と近代性を表そうとしていた。それだけでなく、大部分の新女性の写真は、近代的啓蒙と啓発を趣旨としている雑誌に掲載されることが多い。（主に女性雑誌）¹⁰ こうした雑誌の創刊者の多くは、女性の教育や男女平等、国家と民族の危機などの話題に高い関心を持っていた。このような写真は、決して世俗的な娯楽を趣旨とするタブロイド誌には掲載されなかつ

⁶ 前掲書、p7。

⁷ 『東洋女界之新現象』、『万国公報』、1906 年第 215 号、pp63-64

⁸ 純夫『女子教育』（その一）、張玉法編集『近代中国女権運動資料』、龍文出版社、1995 年、p642

⁹ 呉芝瑛『記秋女俠遺事』、中華書局上海局編集『秋瑾集』、中華書局、1960 年、p190

¹⁰ 煉石『発刊詞』、『中国新女界雑誌』、1907 年第 1 号、p3

た。言い換えれば、新女性と遊女の写真は、ともに公に晒されているが、その掲載される媒体と写真の流布経路が、優雅と低俗を区別するものとなるため、新女性は、依然として公の視線の中で、自己の文明性と進歩性を保つことができたのである。

しかし、注目すべきことは、こうしたモビリティに対する推奨が、実は権力的な言説が浸透したことによって生まれた一種の想像であり、それは同時代の中国人が、近代性を持つ進歩、開放と発展という特質に対する楽観的な想像と過剰の美化が反映されたものであるという点である。このような傾向は 21 世紀まで続き、最も批判精神を備えているフェミニストでさえ、十分な警戒を示さなかった。例えば、エリザベス・プリチャード (Elizabeth A. Pritchard) は、西洋のジェンダー歴史研究において、女性史研究家が、無意識にモビリティと西洋のポスト啓蒙時代の発展と進歩的言説とを関連付けたことによって、所謂、解放性を説くフレームが、時には女性の利益を損なう罠となってしまうということについて鋭く指摘している。¹¹

先述した秋瑾を例にすると、このような新女性は、大衆を相手に宣伝する際、美しい側面を強調するが、プライベートの交流と現実の生活においては、彼女たちは新しい交通手段とモビリティ経験に対してある種の警戒心を同時に抱いていた。このような警戒心は、女性の解放を核とする近代的言説が、女性が家を出ることを促しているが、その近代の言説自体 (ナショナリズム、フェミニズムなど) が、この時期にはまだ概念や意義についての議論が絶えなかったため、モビリティする女性に対して実践的規範を提供できなかったことによる。この行為規範は非常に重要であり、日常生活での絶えない実践を通してこそ、自然と心理的にも、また行為の基準として内在化できるものである。秋瑾の例が典型的である。¹² 彼女が家を出て、蒸気船で日中を往来する際に、そのモビリティへの期待と解放への憧れは、彼女に、乗船している他の階級の異性との共同生活によって生まれる危険性について何も教えなかった。結局、彼女は最も伝統的な自己防衛の手段を取ったのである。

従って、私たちは女性のモビリティ経験を歓迎する同時に、必ず一時停止のボタンを押さなければならない。そして、女性の解放という慣性的な思考と歴史的評価に対して考えなければならない。この思考には二つの側面があり、女性の解放は歴史的経験であり実存である同時に、アカデミックと社会運動における理論分析フレームと思考パターンでもある。

近代以降、数多くの社会思潮と観念が欧米から日本を経て中国に入った。例えば、国家、民主、科学などが挙げられる。こうした観念と言葉における中国での伝播と受容過程とを比較すると、私たちの女性の「解放」の背後に隠されている植民主義的イデオロギーに対する警戒心が足りないことがわかる。その結果、女性の「解放」は近代中国女性史において最も重要なキーワードとなり、また、多くの学者が使用する言葉となった。

なぜこのような現象が起きたのだろうか？ 筆者は以下の二つの側面から考察してみたい。まず、女性が動員される過程における道具性が指摘される。近代歴史の発展過程において、ナショナリストやフェミニスト、政党組織、または国家政権、これらいずれも、女性の動員を重要な課題としてきた。

¹¹ Elizabeth A. Pritchard, "The Way Out West: Development and the Rhetoric of Mobility in Postmodern Feminist Theory," *Hypatia* 15:3 (Summer 2000): 57.

¹² Tani E. Barlow, "Theorizing Woman: Funü, Guojia, Jiating," in *Body, Subject and Power in China*, eds., Angela Zito and Tani E. Barlow, Chicago: University of Chicago Press, 1994, p261.

彼らは女性が国家と社会改造における重要な役割を果たす存在であると考え、女性の思想の解放について盛大に宣伝した。その結果として、20 世紀や 21 世紀でさえ、私たちが女性の解放を支持しようが、反対しようがと関係なく、それそのものが、私たちが女性の問題を考える上での基準となり、ある種の日常的で常套の思想となった。その次に、女性の解放の結果から見ると、これは確かに近代女性生活の経験を大きく変容させている。例えば、身体の変化や教育を受けること、職業の発展、経済の独立、自主意識の形成などが挙げられる。いつしか「解放」を経て、女性が自主性と主体性を持つ集団となったので、これは非常に嬉しい成果と言える。

しかし、ジョアン・スコット (Joan W. Scott) が述べているように、私たちは、女性が主体性を得たことが解放の一種の勝利だと思っているが、この主体性という課題自体が虚偽の命題であることを看過してしまったのではないだろうか¹³。なぜ私たちは主体性を近代の女性解放の証と見なすのだろうか。この問題の背後には、伝統的女性は主体性を欠いた集団であることが暗示されているのではないか。こうした持つ/持たない、伝統/近代といった二元対立構造は、正に私たちが他の領域においても繰り返し問うてきたものではないだろうか。なぜ女性の「解放」もしくは、女性史に限って、私たちは簡単に楽観的、美化的に「解放」の勝利を祝うのだろうか。つまり、私たちは、自明となってしまった観念から脱皮し、女性史を記述し語る時、使用されている基本フレームと概念に対して歴史的に繰り返し省察しなければならない。21 世紀の私たちは、未だこの近代性という居心地の良い場所 (comfort zone) の内から、こうしたフレームと概念を受容してきたのではないか省みなければならない。

筆者はいくつかの例を通して、こうした歴史性を孕む課題と思考が、どのように 21 世紀の今日においても、私たちに歴史と現実の中の女性の問題を想像するために、自然に受容してきたかを明らかにしたい。

第一に、ある種の経歴は「解放」と見なされるということである。例えば、足を自由にさせる、学校の教育を受ける、家を出る、モビリティする、利益を生む、婚姻の自由など。一方、他の経歴は解放の対立面にある「抑圧」とされている。例えば、纏足、文字が読めない、家の中に閉じ込められる、他人の利益を分ける、親が配偶者を決める婚姻など。しかし、私たちはなぜ前者を「解放」の構造内に入れ、後者を「抑圧」の構造内に入れるのか反省することがない。これは、清末からの女性の気質に関わる「定義システム」(defining system) の変化と直接的に関連している。長い間、士紳階級の女性は自分達を儒教の性別規範の定義者、実践者、守護者と考えてきた。しかし、清朝末期になると、今まで自らの身分を証明するものが全て否定されるようになった。纏足は野蛮の象徴となり、家の中で生活することは生産をしていないことになり、生産せず利益を分ける根源にもなっている。女であること、妻であること、母であることは、自分の小さな家しか意識せず、国家を無視するとして非難された。才女という役割は、国と民族の危機と相入れないため酷評される対象となった。このように彼女たちのエリートの地位は脅かされていた。このような状況で、彼女たちは自分達のエリートとしての資源と階級の優位性を利用して、足を自由にさせること、学校教育、公共道德、国家と民族などの近代的な物差しを持って、「尊卑価値の秩序」¹⁴を再構築することで、彼女たちがこの新しい社会階級の最上階に位置しようとした。女性エリートの自らへの権力付与と、自分たちが女性の変

¹³ Joan W. Scott, "The Evidence of Experience," *Critical Inquiry*, 17:4 (Summer, 1991): 773-797.

¹⁴ 劉人鵬『近代中国女権論述：国族、翻訳、性別政治』学生書局、2000 年、pp166-167

革を牽引すべき存在であるという意識は、彼女たちが士紳階級出身の根深いエリート意識に由来している。従って、こうした現代のレッテルを基準とすれば、ある種の新しい権力政治が伝統的社会層の上に立つことになる。このような女性エリートたちは、新興の女性文化、ジェンダーメカニズム、社会階級において優位性と主導性を保ちリーダーシップを発揮しようとした。

第二に、女性地位論、即ち、「女性のレベルの高さは、国家の文明程度を象徴するもの」であるという論理である。今日にも、この観念は社会に広がり、疑う事のない真理と見なされている。しかし、この観念は実は 19 世紀末に西洋の植民地主義的イデオロギーの拡張によって中国に入ってきたのである。林樂知などの宣教師が『万国公報』に掲載した文章の中で、「一国家の教化を論じる際、女性の地位を観察しなければならない。そのことによって教化のレベルを定めなければならない。西洋の文明に教化された国では、女性は皆平等であり、東洋の半ば教化された国では、女性は皆平等ではない。全く教化されていない人々の中で、女性は、奴隷や家畜同様に扱われている。中華は東洋の国において、教化された大国であり、それは女性への態度から伺え、教化された国であることが直ちに証明される。」¹⁵と言及しているように、彼らは地位と性別、国家、民族を関連づけることによって、国家を単位とする一つの階級観念を構築した。この観念はグローバル植民秩序と高度に一致している。例えば、女性の地位の低い国を論じる際、林樂知などはよく、インド、朝鮮、中国などのような、植民地拡張において遅れている国を挙げている。その後、フェミニストやナショナリストたちはなんの疑問も持たずに、こうした女性の地位を国と民族を評する基準として受容した。しかし、その背後に隠されている植民地イデオロギーに対しての省察はなかった。

第三に、男女の平等である。中国の近現代歴史において、女性は絶対的平等と相対的平等の間で揺らいでいることがわかるが、この揺らぎは数多くの歴史問題を生じさせ、今日に至るまで、多くの女性はこの両極端の間で揺らいでいる。例えば、女性は家を出て、男性と同じように働き、収入を得て、家族を養わなければならない。しかし同時に、女性は家での家事や育児という責任も負わされている。どちらも、立派にこなしても、できなくても、批判され否定されてしまうのである。現在の理想としての女性のイメージは、家の内でも外でも活躍できるスーパーウーマンであり、彼女たちは人から羨ましく思われる職業を持つと同時に、家事を、とりわけ育児を完璧にこなさなくてはならない。

男女の平等問題は、近代以降、女性の解放構造の中から生まれ、性別本質主義的な傾向を表している。簡単に言えば、中国の儒教による家族秩序の中では、男女、乾坤、陰陽は関連し、互いに補完している。男女は同じ「人間」として、地位は平等であるものの、上下という「区別」が見られる。¹⁶近代になり、儒教の倫理規範の関係性における身分に揺らぎが生じ、疑問視され、ついには転覆されて、ジョン・フィッツジェラルド (John Fitzgerald) が述べる「カテゴリー・アイデンティティー」(categorical identity) が形成されるようになった。「女性」というカテゴリーを例に、この分類の中では、全ての女性は共同の性別特質を享有すべきであり、秋瑾のような夫と子供と能動的に離れ、日本に留学する女性は、「女性世界のロールモデル」とされた。このように女性を一つのカテゴリーに分類し、男女の平等を一種の社会の理想とすることは、近代国家の出現と国民を新しい道徳的秩序と見なすことと同じ脈絡であり、更に、近代国家の平等と種族の平等が理想的な秩序となっているのと

¹⁵ 前掲書 6

¹⁶ 前掲書 14、pp1-72

同じ脈絡である。¹⁷ 例えば、清末に、多くの新女性は「女性界」と自称し、「男性界」との相互援助を呼びかけていた。また、「女性界」は「商界」や「軍界」、「学界」などの表現と併記されている。興味深いのは、「男性界」は「女性界」としか対照されず、ほかの「各界」と並んで論じられることはなかった。これは、「商界」、「兵界」、「工界」、「学界」などが、当然として男性によってできた「界」であることを表している。

最後に、問わなければならないのは、女性近代の基準で解放されてからも、なぜこの美しくて新しい世界の快楽を実感できないだけでなく、これまでと同じような苦悩と苦痛を感じているのだろうか。今まで、私たちはこうした家の内と家の外の二重の負担が生じた原因を、女性の解放が徹底的に行われていないことによるものと考えてきた。従って、この過程において生じた挫折は、性質的には保守的なものであり、時間的には一時的なものであるため、それは永遠に女性の前進を阻止することはできないと説明してきた。しかし、どのような標準で「解放」の徹底度を測ればいいのか。あるいは、私たちは思考を変え、解放が不徹底であるのか、それとも、解放という枠組み自体が最初から間違っていたのではないのかという問いを立ててみてはどうだろうか。私たちは、この枠組み自体に内在している権力的言説と構造に対して十分な警戒を持たず、もしくは意識しないまま、この枠組みが提示してきた近代性と合法性をそのまま受け入れ、そしてこの枠組みを使用して中国の社会と女性を改造しようとしていたのである。結局、新しい思想が中国の社会に相容れられず拒否反応が起こりその対価を払った（男性も同様であった）。従って、私たちは、女性の解放という思想パターンの歴史性を思想的に意識しなければならない。女性たちが解放された後に直面した複雑な局面を注視し、国家、社会、制度の側面からこうした複雑な局面においていかに対処すれば、女性たちが自ら真の選択ができ——「解放」を選択しようが「抑圧」を選択しようが——そのことによって政治的圧力や道徳的に困難な状況、生活の負担なども背負わなくて済むのか、真摯に悩まなくてはならない。

¹⁷ John Fitzgerald, "Equality, Modernity, and Gender in Chinese Nationalism," in Doris Croissant, Catherine Vance Yeh, and Joshua S. Mostow eds., *Performing 'Nation': Gender Politics in Literature, Theater, and the Visual Arts of China and Japan, 1880-1940*, Leiden; Boston: Brill, 2008, p24.